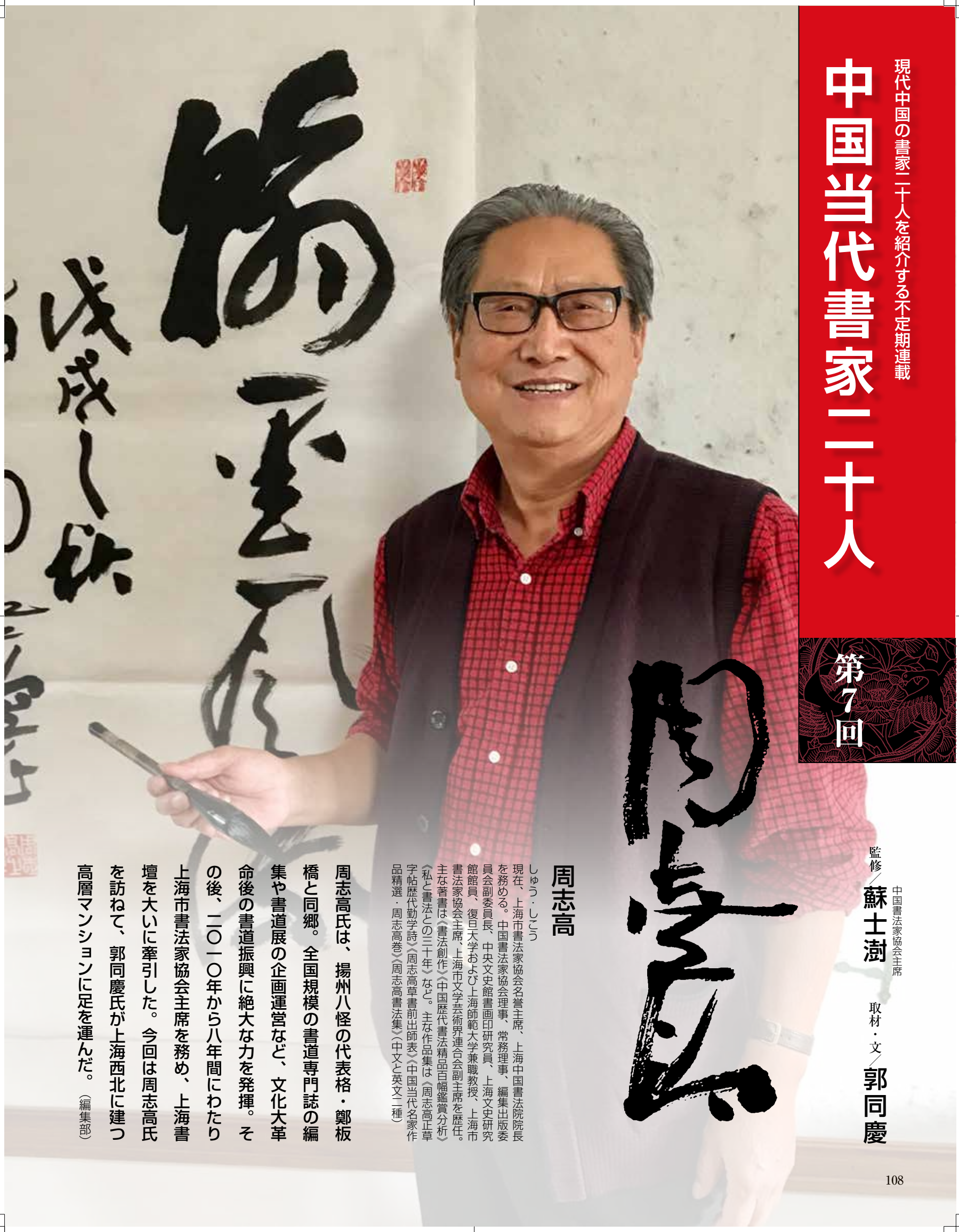
現代中国の書家二十人を紹介する不定期連載

中国当代書家二十人

第7回

監修／蘇士澍 中国書法家協会主席
取材・文／郭同慶



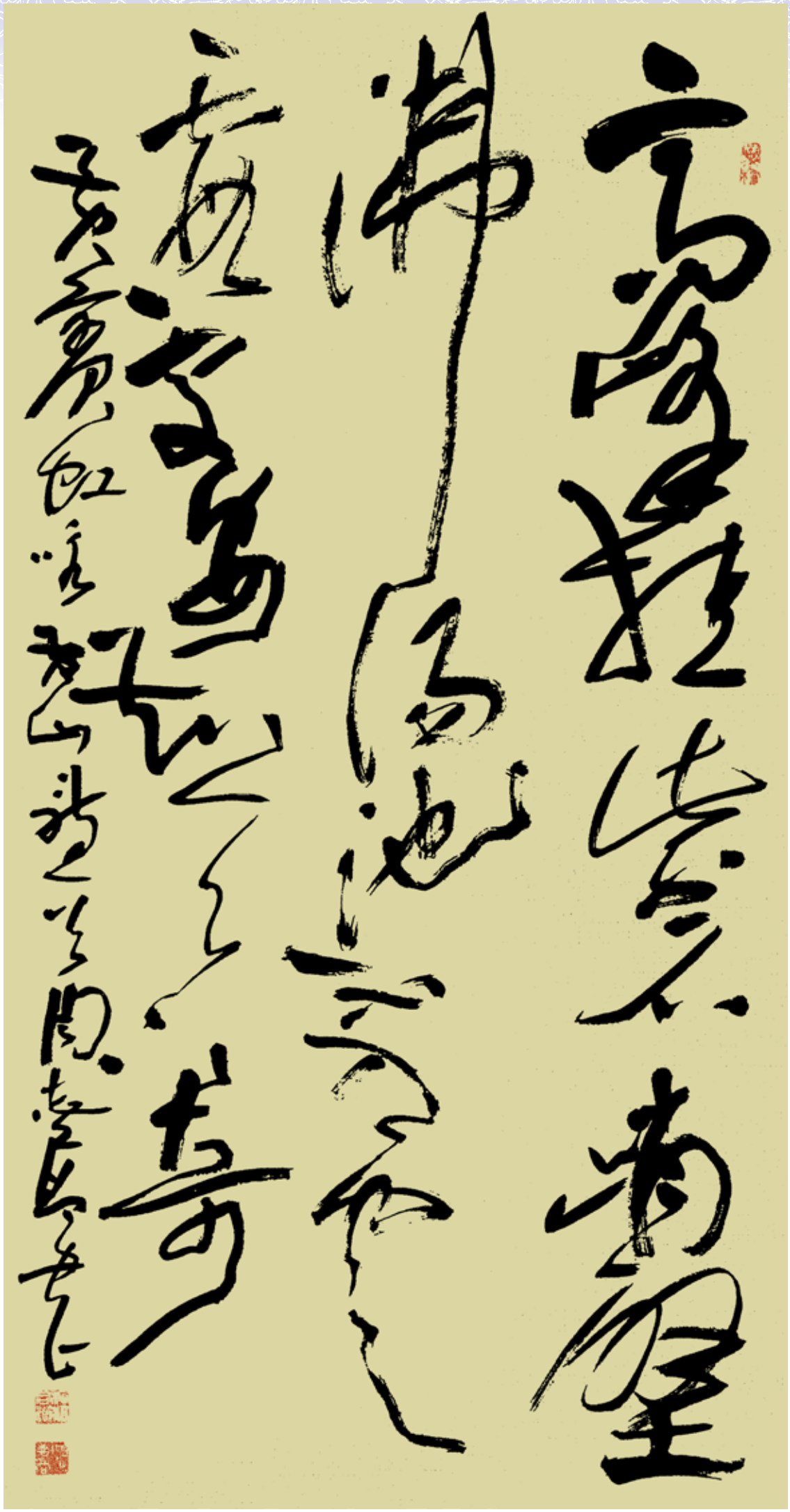
周志高

しゅう・しこう

現在、上海市書法家協会名誉主席、上海中国書法院院長を務める。中国書法家協会理事、常務理事、編集出版委員会副委員長、中央文史館書画印研究員、上海文史研究館館員、復旦大学および上海師範大学兼職教授、上海市書法家協会主席、上海市文学芸術界連合会副主席を歴任。主な著書は《書法創作》《中国歴代書法精品百幅鑑賞分析》《私と書法との三十年》など。主な作品集は《周志高正草字帖歴代勤学詩》《周志高草書前出師表》《中国当代名家作品精選・周志高巻》《周志高書法集》（中文と英文二種）

周志高氏は、揚州八怪の代表格・鄭板橋と同郷。全国規模の書道専門誌の編集や書道展の企画運営など、文化大革命後の書道振興に絶大な力を発揮。その後、二〇一〇年から八年間にわたり上海市書法家協会主席を務め、上海書壇を大いに牽引した。今回は周志高氏を訪ねて、郭同慶氏が上海西北に建つ高層マンションに足を運んだ。（編集部）

中国当代7.indd 108 2018/12/12 16:48



《詠黃山》（黃賓虹）

高峰掛紫石　峭壁沸湯池　不入雲霞處　安知天下奇

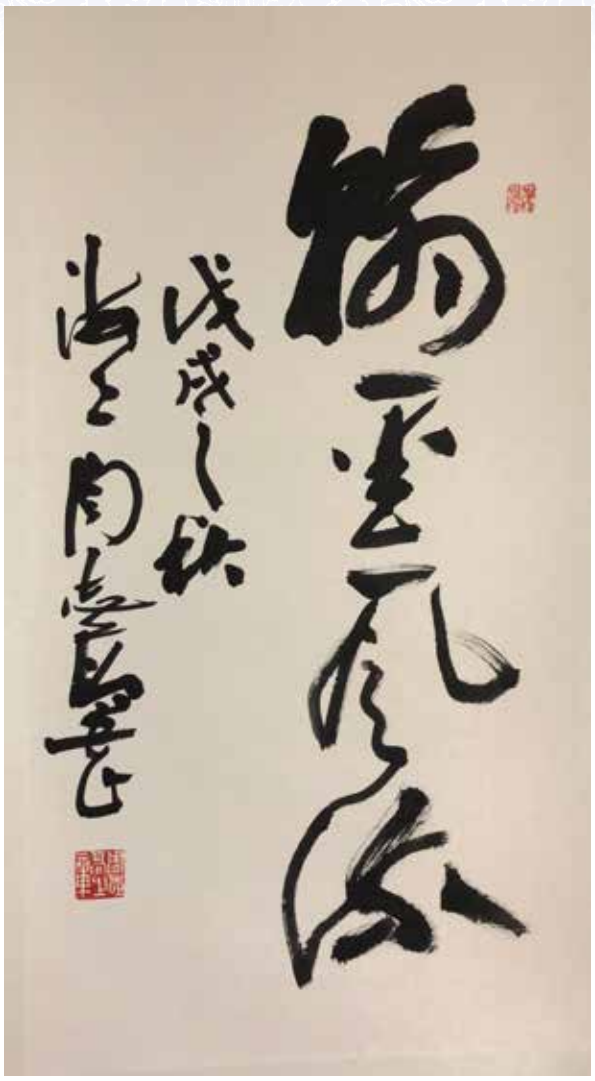
136×68
2008年5月

中国当代7.indd 109 2018/12/12 16:48

書法振興の功労者　周志高

上海書壇に君臨

揚州八怪の代表格・鄭板橋と同郷、中国で最初の書道全国誌《書法》創刊のキーマン、中国書法家協会機関紙《中国書法》編集長の経験者、第一回中国の国展・中国書法篆刻展の仕掛け人、文化や文物が破壊された文化大革命の後の書法復活振興に絶大な業績を積んだ貢献者、二〇一八年十一月まで八年間にわたり上海市書法家協会主席として上海書壇に君臨した周志高が今回の主人公である。去る十月、上海復旦大学図書館百周年記念行事の書画展や揮毫会の参加した後の十七日午前十時、上海西北の高木に囲まれた高層マンション「品尊国際」にある周志高邸を訪ねた。この秋に上海市書法家協会が改選を控え、周氏は冒頭に今日は二時間しかないと明言。しかし早口で語られた壮大な書法人生に大きな感動を覚えた。



《翰墨風流》

135×65　2018年

鄭板橋の故郷が育んだ書法出版人

周志高氏は一九四五年一月に江蘇省揚州市興化県に生まれた。興化県と言えば、鄭板橋の故郷と連想される。同県には趙朴初（一九〇七―二〇〇〇、中国仏教協会主席、中国書法家協会副主席）が題字した《鄭板橋故居》や舒同（一九〇五―一九九八、中国書協初代主席）が題字した《鄭板橋記念館》がある。周志高氏は「板橋同里」という遊印をよく満足した作品に押印し、揚州八怪の代表格である鄭板橋と同郷であることをやはり誇りに思っているようだ。

一九五六年の十一歳の時に、父・良淦氏の意向もあって、単身で上海に移住し、商いを営む実の祖父・応根氏と同居して大都市での生活を始めた。読書が好きな父と違って祖父は京劇俳優・梅蘭芳の大ファンで、家で台詞を教えてくれたり、公演にも連れて行ってくれた。転校後の中山北路第一小学校では、楽しい都会の小学生時代を過ごした。中学校の時に良い先生に出会った。国語を担当する熊炎生先生は、戦前、蔣介石の長男で国民党の要職を務めた蔣経国の部下だった。国語や書写に対する教養が深かった。周志高少年の才能と勤勉さを評価した熊先生は、周少年を班長に抜擢した。先生崇拝もあって、中学校時代は国語と書画が大好きだった。書画の方面で将来が有望と見抜いた熊炎生先生は、周少年に書画専攻を勧め、特別な指導も行った。卒業の一九六〇年に、ちょうど上海市立出版専門学校が開設され、美術専攻課の一五名の定員に対して、二〇〇名以上の応募者があった。周少年は優秀な成績で試験を通過した。

市出版局長・羅竹風（一九一一―一九九六）が初代の学校長を兼任し、市内在住の大物書家、画家などが総動員され、各種の授業を分担した。色彩学は顔文梁（一八九三―一九八八、洋画家、美術教育家）、素描は曹有成（一九二九―、洋画家、美術教育家）、人物画は劉旦宅（一九三一―二〇一一、著名画家）、方増先（一九三一―、著名人物画家、上海美術館長、中国国家画院中国画院長）、山水画は応野平（一九一〇―一九九〇、著名画家）、花鳥画は呉清霞（一九一〇―二〇〇八、著名女流画家）、書道は黄若舟（一九〇六―二〇〇〇、著名書画家、書道教育家）と胡問遂（一九一八―一九九九、著名書家、書道教育家）、国語は復旦大学国語学部主任教授らが兼務。周志高少年は幸運なことに超一流の書画の先生に出会い、また鍛えられたのだ。在学四年間の後半には出版業務

中国当代7.indd　110　　2018/12/12　16:48

に関わる様々な編集やデザインの実務も学んだ。

一九六四年に卒業し、南京路にある画廊経営を兼ねた文房四宝の老舗・朶雲軒（だうんけん）（一九〇〇年開店）に就職。配属されたのは印刷、出版係だ。昔から文人墨客が好む木版水印（木版画印刷）の便箋は店のヒット商品である。周志高氏は古典文学の代表作《紅楼夢》を取り入れ、新しい便箋をデザインし、製作印刷した。一九七〇年に社内で「出版革命組」（文革中は何でも「革命」を付けることが一般的だった）が設立され、周志高氏はその責任者に任命された。先輩の陳履平は画家で、元は人民美術出版社の編集員だった。二人三脚で「出版革命組」を運営した。六〇年代の時代背景を反映した毛沢東語録、魯迅の詩詞を題材に国内の書道篆刻名家が創作した対聯、字帖（法帖）、印譜などを編集出版、また集字字帖を数冊製作した。顔真卿の楷書による《集顔体楷書字帖・王傑日記》や柳公権の楷書による《集柳体楷書字帖・雷鋒日記》、また王羲之の聖教序や蘭亭序文による《集王字行書字帖・智取威虎山》など、人気の手本を出版した。

しかし、古典の名碑名帖は全面的に否定され、約十年間、出版できなかった。また書壇の大御所はみな革命の対象になったり左遷されたりの状況で、作品の出版は許可されない。周志高氏は悩みながら、書法の振興や中堅人材の発掘の分野で懸命に頑張った。一日も早く良い字帖を若者に届けたい思いで奔走した。人気書法家を起用して、劉炳森（一九三七―二〇〇五）の隷書字帖、胡問遂（一九一八―一九九九）の北魏字帖、任政（一九一六―一九九九）の楷書字帖、周慧珺（一九三九―）の行書字帖、張森（一九四二―）の手本を編集出版した。

特に、中国の女流書家の代表格、周慧珺（しゅうすいくん）のデビューには、周志高氏が関わった。米芾調に六朝書の方剛な筆遣いを特徴とする流麗な行書を書く周慧珺の書を世間に広げたいと、周志高氏自身が周慧珺に依頼。しかし、まだ未熟と言って周慧珺が辞退。当初の書壇ではこれ以上に成熟した中堅がいないので、周志高氏が何度も通って説得し、最終的に周慧珺の父親が周志高氏の誠意に感動し、娘の周慧珺に助言してくれた。そのおかげで周慧珺が同意に至り、それから数週間、周慧珺は真剣に取り込み、何回も書き直した。いざ完成したら最高のレベルに達した。それは、文革の後半に出版された当代書法家による第一号の字帖《魯迅詩歌選・行書字帖》だ。想像を遥かに超えた売れ行きとなり、何度も再版され、合計数百万部に達した。周慧珺は一晩で全国的な著名書家になった。その後、その実力と人望が評価され、上海市書法協会主席（二〇〇四―二〇一〇）や中国書協の副主席まで務めた。

周志高氏がいなかったら、周慧珺の今日の成功はなかったともいえるだろう。

書法誌を創刊――書法振興に貢献

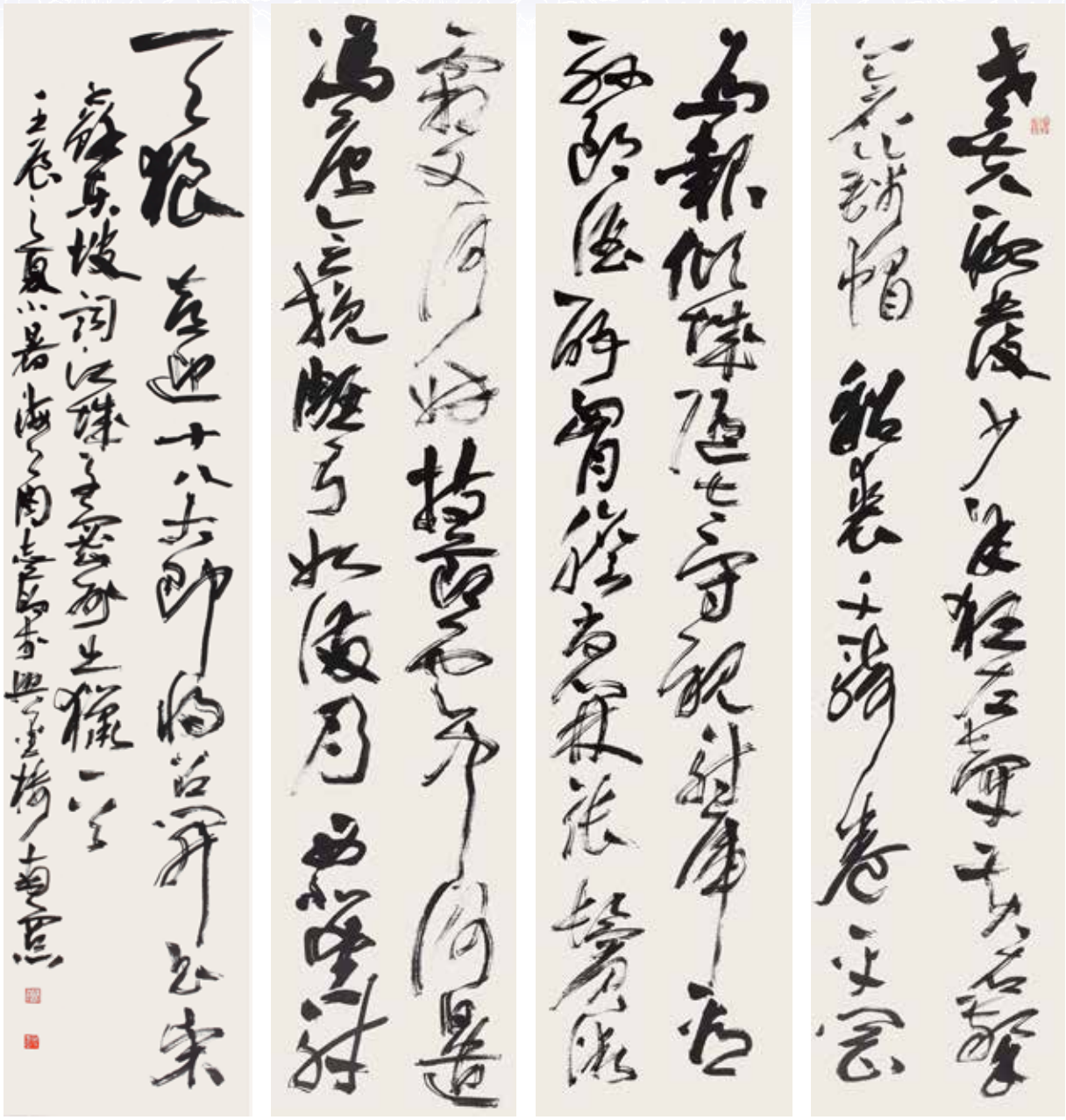
一九七二年に日中国交が正常化され、中国旅行や中

《臨・智永 千字文》

143×35×4　1963年
18歳の時の臨書作

天地玄黄　宇宙洪荒
日月盈昃　辰宿列張
寒来暑往　秋収冬蔵
閏餘成歳　律召調陽
雲騰致雨　露結為霜
金生麗水　玉出崐岡
剣号巨闕　珠称夜光
菓珍李奈　菜重芥薑
海咸河淡　鱗潜羽翔
龍師火帝　鳥官人皇
始制文字　……

中国当代7.indd 111　2018/12/12 16:48



老夫聊発少年狂　左牽黄　右擎蒼　錦帽貂裘　千騎卷平岡　為報傾城随太守　親射虎　看孫郎　酒酣胸膽尚開張　鬢微霜　又何妨　持節雲中　何日遣馮唐　會挽雕弓如満月　西北望　射天狼

《江城子　密州出獵》（蘇東坡）

235×53×4
2012年7月

国訪問のブームがあった。日本書道代表団が朶雲軒に訪ねると、周志高氏が応対の担当だった。土産としていただく日本の書道雑誌や碑帖の出版物を興味深々で読み通した。その度に隣国の書道の発展ぶりに感動したという。

一九七四年十月に香港の出版人の梁披雲、李秉仁、呉羊璧らが共同で創刊・発行した書道専門誌《書譜》が内地に流入、《書譜》を手にした周志高氏は大きな衝撃を受けた。英語が公用語のイギリス領・香港が内地より先に古典書道を重んじる専門誌を発行し、一歩リードした格好に対して、夜も眠れない思いになった。周志高氏は、香港に優る上海の文化的底力を信じ、内地で第一号となる書道専門誌の創刊のために奔走した。

文化大革命（一九六六―一九七六）の幕が引かれようとする一九七〇年代には、出版許可はなかなか下りなかった。周志高氏は後輩の黄簡（一九五〇―）と組み、二年がかりの苦労を経て、一九七六年に試作号《書法》を出版、一九七七年に不定期雑誌として正式出版すると直ちに全国で飛ぶように売れた。後に、編集部の人手が足らなくなり、前後に方伝鑫、高式熊、潘德熙、王宇仁、王壮弘、呉崇文など、書道史や書道理論を得意とする書壇の実力者が入社し、編集力を充実させた。一九七九年より隔月刊として定着した。当時、国務院副総理の陳慕華女史が書簡を送り、祝意を伝えると同時に長期購読の申込み希望を伝えてきたほど、大人気の雑誌になった。翌年には出版部門が独立し、朶雲軒グループの大黒柱として上海書画出版社が誕生した。周志高氏が編集長を担当した《書法》は、八〇年代において四〇万部の販売数を維持し、最高時は四三万部に達した。八〇人規模の出版社だが、《書法》の売上に頼るほど貢献度が高かった。《書法》は様々なテーマで書法の古今を紹介し、初期は宋の四大家（蘇東坡、黄

中国当代7.indd　112　2018/12/12　16:48

庭堅、米芾、蔡襄）の特集連載や、新出土の木簡、竹簡の資料発表や研究論文などが特に好評だった。

《書法》で書道振興に貢献しようとしても雑誌の発行部数だけでは限りがあると考えた周志高氏は、初の全国公募展を手掛けた。中国書法家協会は一九八一年に北京で設立されたが、周志高氏は、まだ全国書法組織がない状況下で《書法》を主催とし、中国書法家協会設立準備委員会などの協力を得て、「全国群衆書法コンクール」（一九七九年十月）、「全国第一回書道篆刻展」（一九八〇年五月）、「全国書学理論シンポジウム」（一九八一年十月）、「全国篆刻コンクール」などを企画運営した。一九八〇年、遼寧省博物館で開催した「全国第一回書道篆刻展」は、後に設立された中国書法家協会に初の「国展」として追認され、周志高氏と《書法》誌による書道振興の貢献度が高く評価された。ちなみに「全国第二回書道篆刻展」は、五年後の一九八五年に開催された。

周志高氏の《書法》編集長としての実力が評価され、二〇〇三年五月に中国書法家協会上層部の意向を受け、協会機関紙《中国書法》の編集長に就任。その年に、原因不明といわれる「重症急性呼吸器症候群」、いわゆるサーズ（SARS）が広東省より全国へ蔓延し、四月の北京は厳重な汚染区という厳しい状況に陥っていた。周志高夫婦はそれを恐れず、五月二日に特別快速列車で上京した。《中国書法》編集部がある平和里も、穏やかな状況ではなかった。編集部の直ぐ近くに伝染病治療センターがあり、絶えず救急車のサイレンが聞こえてきた。

《中国書法》編集長を務めた北京の八年間の生活のスタートは、サーズとの戦いだった。その間、周志高氏は、中国書法家協会のビッグプロジェクトである《中国書法（六〇年）大事記》編纂事業の執行主編を任された（主編は中国書法家協会の当時の主席・張海）。全国の一〇名ほどの書法理論家を統括し、二〇〇六年から三年間を掛けて二三〇万語の原稿を完成させ、二〇〇九年に中国文物出版社（社長・蘇士澍）より上中下の三巻で発行された。主な内容として、（一）各回全国書法展入選および入賞、（二）学術研究成果、（三）中国書法家協会の重大事項、（四）組織建設および歴代協会役員、（五）対外交流、（六）書法教育など、十二項があった。一九四九年の中華人民共和国設立後の六〇年の書壇を総括した。

上海書壇を牽引した主席

二〇一〇年は上海市書法家協会役員改選の年で、周志高氏は上層部の意向を汲んで上海に戻った。九月に開催された第六回上海市書法家協会理事会および会員大会で、周志高氏は主席に選出された。

周志高主席は、直ちに三大事業に取り組んだ。

まずは、翌年に開催する予定の第十回全国書法篆刻展を上海へ誘致する準備に取り掛った。日本の日展に相当する中国の「国展」は、原則として中国文学芸術界連合会と中国書法家協会が共同主催、四年に一度、かつ各省・直轄市の書法家協会が順番待ちで協力して実行するというスタイルだ。第一回（一九八〇年）は遼寧省（瀋陽）、第二回（一九八五年）は福建省、第三回（一九八七年）は河南省（鄭州）、第四回（一九八九年）、第五回（一九九二年）、第六回（一九九五年）、第七回（一九九九年）は北京、第八回（二〇〇四年）は陝西省（西安）、第九回（二〇〇七年）は広東で開催された。第十回全国書法篆刻展を誘致したいと考えたライバルの場所は複数あった。最終的に上海と広西省の両地の共同開催で落ち着いた。上海会場は草書、楷書、隷書、広西省会場は行書、篆書、篆刻および刻字を展示し、初の同時開催が実現した。周志高主席は自ら精

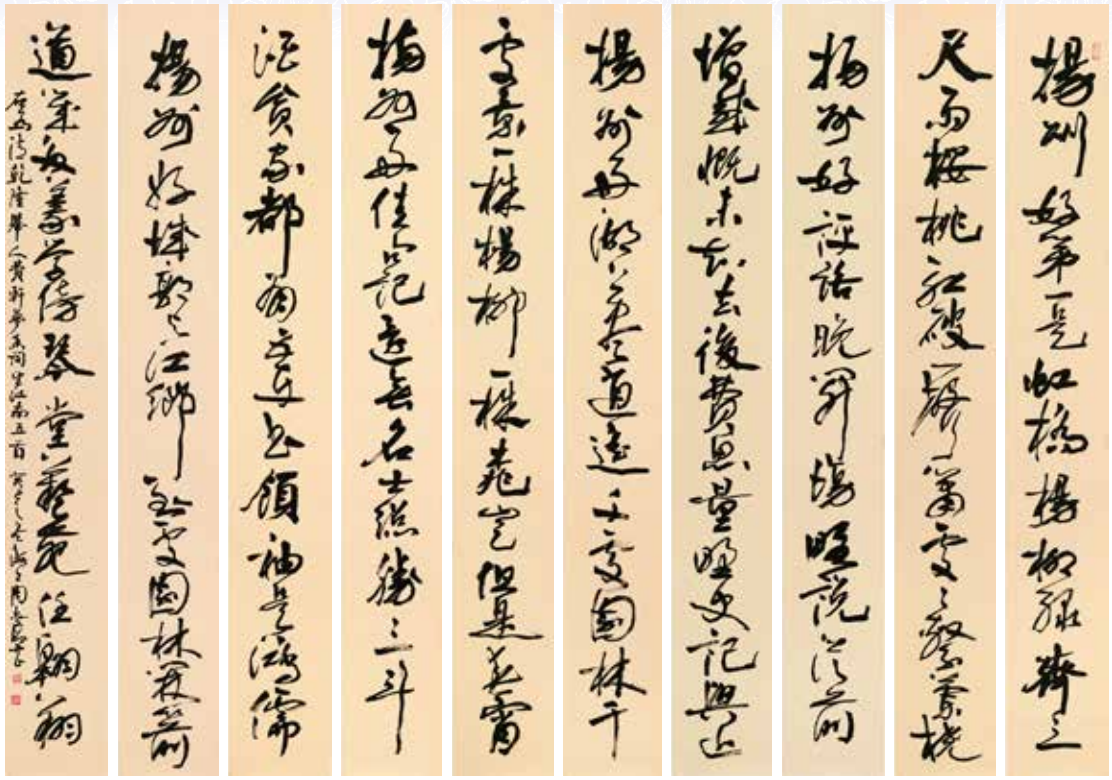
1980年4月、第1回中国書法篆刻展が開催。準備委員会の主なメンバー。前列左より、劉炳森、姚志忠、沈鵬、傅家寶。後列左より、周志高、蘇士澍など

1981年5月10日、中国書法家協会が設立。国務院副総理・方毅が役員と記念写真。前列左より、李立、商承祚、沙孟海、方毅、陸石、費新我、李半黎。後列左より、周志高、蘇士澍、高文、佟韋、王景芬、白煦

1981年10月、蘭亭で書法雑誌社と中国書法家協会が共同主催した初の中国書学シンポジウムで周志高は事務局長を務めた（前列左より1人目）。初代主席・舒同、沙孟海、陳叔亮、徐邦達など大御所らも出席

中国当代7.indd 113　2018/12/12 16:48

《夢香詞・調寄望江南》（費軒）



175×13.5×10　2013年10月

楊州好　第一是虹橋　楊柳緑斉三尺
雨　桜桃紅破一聲蕭　處處住蘭橈
楊州好　評語晩開場　略説従前増感
慨　未知去後費思量　野史記興亡
楊州好　湖上尽逍遙　千處園林千處
景　一株楊柳一株桃　豈但是春宵
楊州好　佳句記還無　名士総勝三斗
酒　貧家都有五車書　領袖是鴻儒
楊州好　城郭興江郷　到處園林開箭
道　幾多義学傍琴堂　藝苑任翺翔

高主席は、文化都市・上海、書法都市・上海としてのイメージアップを図ったのだ。

第三の取り組みは、上海書法の国際化の強化である。上海書法家の作品展を米国、フランス、ドイツ、ロシアなどで開催、周志高主席は団長として書法家代表団を率いて各国の芸術家たちと交流した。

近年、周志高主席は、行政や民間企業のバックアップにより上海中国書法院を創設した。年齢制限で各協会の役員を退いた書法家を集めて、書法家同士のハイレベルな交流のステージをプロデュースする狙いだ。様々な展覧会やシンポジウムを開催し、高齢な書法院のメンバーたちは若返ったように活発に参加した。また、海外で活躍している元上海籍の書法家数名を名誉院士として迎えた。アメリカ在住の屠新時、黄一知、日本在住の郭同慶、胡永華、および台湾の張炳煌、香港の戚谷華などが招聘された。二〇一六年には孫文生誕一二〇周年を記念した国際招待書法展を書法家協会とともに共同主催、上海と香港の二会場で盛大に開催した。日本からも新井光風、石川芳雲、尾崎蒼石、杭迫柏樹、高木聖雨などの大家の作品が招待出品された。

八年間にわたり主席として上海書壇を牽引した周志高氏は、語り尽くせないほどの実績を残した。

輝く書法大家

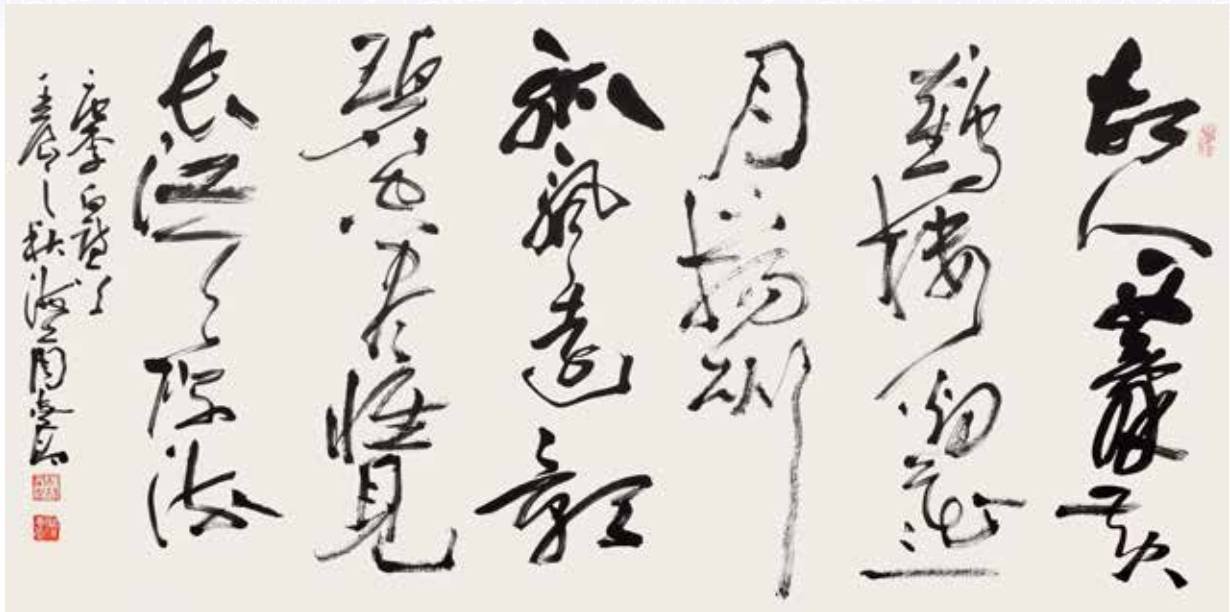
一九六一年、周志高少年が上海市立出版専門学校の二年生として通っている年に、上海で書法史に残るある出来事があった。毛沢東と上海市長の陳毅が直に批

《啓功恩師逝世周年紀念》

136×34×2　2006年7月

培育深恩終身感戴　謙和高德百世流芳

中国当代7.indd　114　2018/12/12　16:48



《黄鶴楼送孟浩然之広陵》（李・白）

故人西辞黄鶴楼
烟花三月下揚州
孤帆遠影碧空尽
惟見長江天際流

65×135
2012年

准した「上海中国書法篆刻研究会」が誕生。会長は二度の日本留学経験を持ち、北京大学長などを歴任した沈尹黙（しんいんもく）（一八八三―一九七一）だ。沈尹黙氏は晩年には上海で書法の普及にも尽力した。王羲之調の行書は非常に高貴な書風をもって評価が高かった。毛沢東に送った書作は政府が発行した《中南海収蔵書画集》のトップページに掲載され、周恩来は首相官邸や自宅に沈氏の書を飾るというほどの書壇の大御所である。その研究会の事務局長を務めたのが上海市立出版専門学校書法講師の胡問遂だ。成績が一番だった周志高少年に、胡先生は上海市青年宮で開催された沈尹黙翁の書道講座を推薦したのだ。周志高少年はそれに通い、また胡先生の推薦状を持参して四川北路にある沈尹黙翁の自宅を訪問した。《陰符経》の臨書作を添削してもらうほど、沈尹黙翁に可愛がっていただいたのである。上海書壇の大物である白蕉、馬公愚の自宅にも通い、教授を受けた結果、出版専門学校を卒業した際には、周志高少年は成績がトップで、希望した朶雲軒に就職を果たした。周志高氏は、若かりし時に受けた沈尹黙、白蕉、馬公愚、胡問遂などの諸先生の貴重な教えを日々咀嚼し、その後に書道人生で大きな成果につなげたのである。

行書や行草体を得意とする周志高氏は、第一回（一九八〇年）より第一一回（二〇一五年）までの「中国書法篆刻展」、さらに中国書法家協会や上海書法家協会が主催した各種の国際招待書法展に出品し、数十の作品が国内外の美術館・博物館・記念館に収蔵されている。また、アジア、ヨーロッパ、北米、オーストラリアの数十カ国、および台湾、香港、マカオなどを歴訪し、展覧会を中心に各国・地域の芸術家たちと交流を行ってきた。

人民大会堂に作品を飾ることは書法家の夢だ。周志高氏はその夢を現実にした。二〇一三年六月、北京人民大会堂および人民解放軍軍事委員会ビルの依頼を受け、同郷・鄭板橋の七言絶句《詠竹》による大作を収めた。また、中央政府の指名により、二〇一五年九月二日に国家主席・習近平が主催した国宴の招待状や次第表、メニューなどを揮毫した。

日中の書法交流にも尽力した。一九八七年の日中蘭亭の曲水流觴の会にも参加し、姉妹都市の大阪や横浜で書法交流を推進した。

1987年11月、周志高は沈鵬とともに中国婦人書法家代表団顧問として来日。左より3人目が周志高、4人目が沈鵬

郭同慶　かく・どうけい
書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に来日。王蘧常、銭君匋、蕭海春に師事。二〇一四年度に上海（朶雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で作品集《墨海一粟》を出版。翰墨書道会長、東京藝術院長、東京海派書画院常務副院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、日本王蘧常先生顕彰会会長、豊道春海顕彰会顧問、日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海中国書法院名誉院士、上海呉昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事などを兼ねる

中国当代7.indd 115　2018/12/12 16:48